The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バリ語（東ナイル語派）概説
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2025, 36, p. 133-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』36 号（2025）pp.133-153

バリ語（東ナイル語派）概説

An introduction to Bari (Eastern Nilotic)

仲尾　周一郎*

NAKAO Shuichiro

0. はじめに

記述言語学的伝統では、浩瀚な文法書・辞書・テクスト集といった、専門家に向けたレファレンス類が最終的な成果目標とされる傾向が強く、「社会還元」というと対象言語が話される地域社会への還元（母語教材など）を指すのがほとんどである。一方で、研究者自身が属する社会の学生・一般市民向けの教養としての還元は限定的である。特にサブサハラ・アフリカをはじめとするグローバルサウスで話される小規模言語についての成果は、専門知としてしかアクセスされない傾向が強い[1)]。

こうした問題関心のもと、本稿では筆者自身の調査と教育実践に基づき、アフリカの一言語であるバリ語について、「外国語」ないし言語一般に関心をもつ学生や一般向けにその一端を紹介することを目的とする[2)]。本稿の目的は包括的な記述や学術的な議論ではなく、いわば「外国語学的」なバリ語の紹介であることを断っておきたい。なお、本稿では基本的な言語学術語や国際音声字母（IPA）については解説を省略する。

1. 歴史・社会的背景

アフリカで話される土着の言語の大多数は、仮説的に、共通の祖先をもつ 3 つの大規模なグループに系統分類される（アフロアジア語族 Afroasiatic、ニジェール・コンゴ語族 Niger-Congo、ナイル・サハラ語族 Nilo-Saharan、その他小規模な言語グループも存

---

* 大阪大学大学院人文学研究科准教授（Graduate School of Humanities, Osaka University）

1) アフリカ諸語研究を土台とした近年の一般向け書籍としては塩田編（2012）や古閑（2022）、教育実践報告の好例としては小森（2023）が特筆に値する。本稿も部分的に小森（2023）から着想を得ている。町田（2010）や中川（2021）も一般に向けた記述言語学的成果の還元の好例だが、グローバルノースの「少数言語」が主な題材であることは指摘したい。大学等で開設されている講義や講座にも注目すべきものは多いが、その実態は十分明らかでない。

2) 本稿は 2024 年 5 月 25 日に国際基督教大学（バリ語フィールドメソッド）・大阪大学（アラビア語演習 IV）の遠隔授業で使用した資料の増補版である。企画していただいた李勝勲先生と参加者諸氏には謝意を表したい。本稿のバリ語データは 2020–2024 年バリ語母語話者の David Gore 氏の協力のもと日本で収集した。同氏には改めて謝意を表したい。本研究は国立国語研究所プロジェクト（「体言化の実証的な言語類型論－理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から－」）・科研費研究課題 19K13160, 23K21931, 24K16054 の成果を一部に含む。

在する）。アフロアジア語族にはアラビア語、ヘブライ語、アムハラ語、ハウサ語、中期エジプト語、ニジェール・コンゴ語族にはスワヒリ語、リンガラ語、ウォロフ語、ヨルバ語、アカン語など、これまでに日本語で教科書が著されたことがある、情報アクセスが比較的容易な言語が含まれるが、ナイル・サハラ語族にはそのような言語はない。

ナイル・サハラ語族の内部構成については研究者の意見が一致しないが、南北スーダンとその周辺で話される東スーダン語派（Eastern Sudanic）とよばれる大きなサブグループの存在は広く認められてきた。この語派では、中世にはギリシア文字を元にした表記習慣（ヌビア文字）をもっていたヌビア諸語（Nubian）や、東アフリカの人類学的研究などを通じて知られるヌエル語（Nuer）、マサイ語（Maa）といったナイル諸語（Nilotic）が有名である。このナイル諸語のうちヌエル語は西ナイル語派（Western Nilotic）、マサイ語は東ナイル語派（Eastern Nilotic）というサブグループに分類される。

本稿で扱うバリ語（Bari）は、伝統的に南スーダンの南部、中央エクアトリア州のナイル川（バハル・エル・ジェベル川）両岸に住む農牧民であるバリ人により話される東ナイル語派の言語である。首都ジュバの土着の言語という側面もあり、60 以上を数える南スーダンの諸言語の中では比較的大きく、正書法や母語教材も比較的よく整備されている[3]。隣接地域のエスニック・グループによって話されるカクワ語（Kakwa）、ク語（Kuku）、ニャンバラ語（Nyangbara）、ニェプ語（Nyepu）、ポジュル語（Pojulu）、マンダリ語（Mandari）といった諸言語とはかなり近い関係にあり、これらは東ナイル語派の中の下位分類としての「バリ語派」をなしている[4]。

文法的な特徴として、バリ語派はほぼ常に SVO 語順で[5]、名詞に格は示されず、動詞にも主語や目的語は示されない（ただし動詞は時制・相・モダリティ・焦点による複雑な活用をもつ）。これに対し、マサイ語などのバリ語派以外の東ナイル諸語は VSO 型の基本語順をもち、動詞に続く主語名詞は主格形になり（日本語の「が」に相当）、主語・目的語人称に従って動詞が活用する。両者間の差異はかなり大きいといえる。

---

[3] 最新の *Ethnologue* 第 27 版（Eberhard et al. 2024）は話者人口として 941,000 人と推定している。南スーダンの諸言語については仲尾（近刊）参照。

[4] バリ語が代表とされているのは、後述のとおり、その話される地域がナイル沿岸であり西洋人との接触が早く、宣教や植民地統治の基地が建設されたこととも関わる（栗本 2001）。なお、より中立的にこれらの言語集団をまとめて「カロ」（Karo）という呼ぶことも提案されているが、現在の学界では一般的でない。

[5] ここでの略号は以下の通り：S＝ 主語（他動性は問わず）、V＝ 動詞、O＝目的語。

(1)　マサイ語（Tucker & Mpaayei 1955: 60, 200 を改変、声調表記はママ）

a. áa-dɔ́l　　nanʊ　　「私（= 1SG）は彼（女）（= 3SG）を見る」

3SG>1SG-見る 1SG.[対格]

b. á-dɔ́l　　nanʊ́　　「彼（女）は私を見る」

1SG>3SG-見る 1SG.[主格]

c. ɛ-ɲɔr　　tinkoi　　nkiʃu　　「ティンコイは牛たちを愛する」

3SG-愛する ティンコイ.[主格] 牛.[複数].[対格]

(2)　バリ語

a. nân　mɛ̀~mɛ́t　　ɲè　　「私は彼（女）を見る／私には彼（女）が見える」

1SG [非過去]~見る[6] 3SG

b. ɲé　mɛ̀~mɛ́t　　nàn　　「彼（女）は私を見る／彼には私が見える」

3SG [非過去]~見る 1SG

c. làdô　ɲà~ɲár　　kísùk　　「ラドゥは牛たちを愛する」

ラドゥ [非過去]~愛する 牛.[複数]

バリ語には近隣の西ナイル語派や中央スーダン語派（いずれもナイル・サハラ語族）からの影響、その他の東ナイル語派の諸言語は東クシ語派（アフロアジア語族）の影響あるいは相互関係が顕著にみられる。こうした諸言語との古期の言語接触が東ナイル語派内の分岐に影響したことが推定される。ただし、東ナイル語派はナイル・サハラ語族の言語としては珍しく、文法的な性をもつ点は共通の文法的特徴として重要である（基本的には男性 vs. 女性で、無生物名詞も男女いずれかの性をもつ）。

バリ語が書記記録に残るのは 19 世紀以後である。ムハンマド＝アリー朝エジプトの南下政策の一環として、トルコ人指揮官のもとナイル上流探検隊が 1840 年に現在のジュバを含むバリ語地域に到達している。1850 年代には特にカトリック宣教団による研究が始められ、1860 年代には語彙集付き文法書も出版されている[7]。Spagnolo（1933）は問題も多いが、アフリカ諸語記述研究の初期の古典的作品であり、現在も実例が引用されるほどである。バリ語は、アフリカ大陸中央部の言語としては、かなり早く研究が

---

[6] バリ語の音素表記には IPA を用い、逐語訳は Leipzig Glossing Rule に則りつつ（重複素の境界は ~ で示す）、人称代名詞を除き文法術語は日本語（[ ] 内）を用いた。

[7] この経緯については Spagnolo（1933）、村橋・仲尾（2021）参照。

開始された言語の一つだといってよいだろう。

1850–60 年代のバリ地域では象牙や奴隷を主な輸出品とするナイル交易の中心地として南ヨーロッパやエジプト・スーダンなどの商人が商業基地を展開していた。こうした社会背景を受け、この地域では通商語としてのアラビア語ピジンが発生していたようである。その末裔ともいえるジュバ・アラビア語（Juba Arabic）は、現在も南スーダン（特にエクアトリア地域の都市部）の共通語ないし実質的な母語となっているが、バリ語をはじめとする南スーダンのアフリカ諸語の影響を強く受けている[8)]。同時にバリ語もジュバ・アラビア語から影響（特に語彙の借用）を受けている。19 世紀末にはマフディー軍（スーダン側から）、続いてイギリス（ウガンダ側・スーダン側から）やベルギー（コンゴ自由国側から）がバリ地域を占領したが、こうした中でバリ語は、これらのヨーロッパ人が植民地軍の共通語として導入したスワヒリ語やバンガラ語／リンガラ語（コンゴ川中上流域の共通語）からも少数の語彙を借用している[9)]。

2. 母音

バリ語を含む西アフリカから東アフリカにかけて話される多くのアフリカ諸語では、日本ではウラル諸語やいわゆるアルタイ諸語の特徴として有名な、母音調和（つまり母音をグループわけした上で、1 語中にはそのいずれかのグループの母音だけが現れるという現象）がみられる。アフリカでは、「[±ATR] 素性」（Advanced Tongue Root）という特徴が関わるのが典型的である（古閑 2022: 55–56 も参照されたい）。 [+ATR] とは基本的には舌根が前寄りの状態で母音が発音されること、[-ATR] はその逆である[10)]。

バリ語には (3) のとおり、この特徴により区別される 5×2 つまり 10 個の母音が存在する（長短は区別されない）。この区別は正書法ではごく不完全にしかなされない。

---

8) 現時点では Nakao（2012）が参照できるが、議論には問題も残っている。その姉妹言語として、ウガンダ・ケニアで話されるヌビ語（Nubi, アラビア語クレオール）も知られる。ジュバ・アラビア語やヌビ語については稿を改めて紹介したい。

9) バントゥ諸語からの借用については Nakao（forthcoming-a,b）参照。南スーダンではバンガラ語・リンガラ語は伝統的に一部共通語として話されるが、スワヒリ語は伝統的に話されるわけではない。ほか、バリ語にはイタリア語・ラテン語（主にカトリックの影響）や、南スーダンの公用語である英語からの借用もみられる（Spagnolo 1960 参照）。

10) 国際音声字母では独自の [±ATR] の表記も定義されているが、この特徴は母音の開口度や前後舌性の違いを伴い、実際の表記では基本母音記号のみが用いられることも多い（[±ATR] 記号は使用されない）。本稿でもこの慣習に則って基本母音を使って表記している。

(3)　-ATR:　a, ɛ, ɪ, ɔ, ʊ（正書法ではそれぞれ a, e, i, o, u）
　　+ATR:　ʌ, e, i, o, u（正書法ではそれぞれ ö, e, i, o, u）

以下に見る (4) 名詞複数形や (5) 単数形を表す接尾辞[11]、(6) ある種の自動詞基本形語尾・命令形接尾辞、(7) 序数詞を表す接頭辞の例から分かるように、ふつう語幹部分は替わらず接辞が語幹の母音の影響を受ける。この傾向は世界の諸言語に広くみられるが、接頭辞の母音調和は少数派だといわれる。日本で広く学ばれる外国語の中では、トルコ語やハンガリー語では接尾辞は母音調和するが、接頭辞はしない。

(4)　単数　複数
　a. dìŋît　dìŋít-**án**　「時間」（-ATR）
　　pìrît　pìrít-**ʌ́n**　「場所」（+ATR）
　b. kíŋâ　kíŋá-**ɟìn**　「年」（-ATR）
　　kíɲó　kíɲó-**ɟìn**　「食べ物」（+ATR）
　c. kídí　kídj-**ât**　「井戸」（-ATR）
　　kídí　kídj-**ʌ̂t**　「肩」（+ATR）

(5)　複数　単数
　　ràbòlò　ràbòlò-**tât**　「バナナ」（-ATR）
　　gùrù　gùrù-**tʌ̂t**　「トカゲ」（+ATR）

(6)　基本形　命令形
　　rɔ́m-**án**　rɔ̀m-**ɛ́**　「挨拶する」（-ATR、-Vn 型自動詞）
　　ljʌ́ŋ-**ʌ́n**　ljʌ̀ŋ-**é**　「喜ぶ」（+ATR、-Vn 型自動詞）

(7)　基数　　序数
　　mɔ̀rɛ́k　「二」　**tɔ̀**-mɔ̀rɛ́k　「二番」　（-ATR）
　　gèléɲ　「一」　**tò**-gèléɲ　「一番」　（+ATR）

---

11) バリ語を含むナイル諸語では複数形に接尾辞を付すことで二次的な単数形（singulative）を作ることも多い。単数・複数接尾辞は多様で、語ごとにどの形になるかが決まっている。

しかし、この原則は必ずしもこのように働くわけではない。たとえば、(8) あるタイプの自動詞や他動詞の命令形、(9) あるタイプの単数形接尾辞、(10) 動詞から派生される人間名詞の接頭辞、(11) あるタイプの形容詞の女性形（3 節参照）接頭辞に現れる母音は、語幹の母音を問わず [+ATR] ないし [-ATR] のいずれかで一定している。

(8)　基本形　命令形

a. wʌ̀r-ʌ̂　wʌ̀r-ʌ̀-**ní**　「歩く」（+ATR、-V 型自動詞）

kìt-â　kìt-à-**ní**　「働く」（-ATR、-V 型自動詞、だが **-ní** にならない）

b. tùr-ɟʌ̂　tùr-ɟ-**í**　「追う」（+ATR、他動詞）

dɛ̀r-ɟâ　dɛ̀r-ɟ-**í**　「料理する」（-ATR、他動詞、だが **-í** にならない）

(9)　複数形　単数形

a. tóróɓò　tóróɓò-**tî**　「荷物」（+ATR）

gwándà　gwándà-**tî**　「キャッサバ」（-ATR、だが **-tî** にならない）

b. pátá　pátál-**ì**　「紐」（+ATR）[12)]

dʉ̃ŋêt　dʉ̃ŋés-**ì**　「クラン」（-ATR、だが **-ì** にならない）[13)]

(10)　単数形　複数形

kà-kít-ànît　**kà**-kít-àk　「働き手」（-ATR）

kà-dʉ̃k-ʌ̀nît　**kà**-dʉ̃k-ʌ̀k　「大工」（+ATR、だが **kʌ̀-** にならない）

(11)　男性形　女性形

lɔ́-ɓɔ́t　**ná**-ɓɔ́t　「良い」（-ATR）

ló-bót　**ná**-bót　「太い」（+ATR、だが **nʌ́-** にならない）

このように時に母音調和の原則が崩れることは、母音調和をもつ言語であればままあることである。しかし、バリ語ではさらに、接尾辞にあわせて語幹側の母音が調和するといった現象も、僅かながらみられる（少数の名詞の複数形形成のみ）。この場合には、

---

12) /l/ は語末では消失する、あるいは声門閉鎖音 [ʔ] として現れる（方言差）。
13) /s/ は語末で /t/ として現れる。

[±ATR] 素性に加えて開口度の調和（e, ɛ が i、o, ɔ が u になる）も見られる。(12a) のように必ずしも語幹が母音交替しないものも（部分的に (9) を再掲）、(12b) のように必ず母音交替するものもあるが、いずれにせよ、こうした語幹が接辞に母音調和するという現象はバリ語では例外的であり、通言語的にもやや珍しい。

(12) 複数形 単数形

a.	pátá	pátál-**ì** ~ **pʌ́tʌ́l-ì**	「紐」
	tóróɓò	tóróɓò-**tî** ~ **túrúɓù-tî**	「荷物」
b.	kàdɛ́n	**kʌ̀dìn-î**	「木」
	kɔ̀rɔ́pɔ̀	**kùrúpù-tî**	「葉」

親族名称語彙では、これをさらに一歩進めたような、さらに興味深い現象が見られる。バリ語の所有表現では基本的に (13) のような所有人称代名詞がもちいられるが、少数の親族名称では、(14a) のような「あなたを」を表す古い接尾辞 -ù が現れる。さらに、父母・兄弟姉妹を表す語では、この -ù が語幹にのみこまれ（いわばある種の接中辞となり）、語幹の母音交替のみによって「あなたの」を表すようになっている。この場合も語幹全体が [±ATR] 素性について母音調和している。

(13) kàdî ínòt 「あなたの家」
家 あなたの

(14) 基本形 あなたの～

a.	mèrɛ́ɲè	mèrɛ́ɲ-**ù**	「祖父」
	jàkáɲè	jàkáɲ-**ù**	「祖母」
b.	kìŋàsɛ̂r	**kìŋʌ̀sûr**	「姉／妹」
	ŋɔ́tɛ̂	**ŋútî**	「母」

ほかに、ある種の母音調和のようにみえるが、うまく特徴づけにくい現象も存在する。(15) に示すように、他動詞の受動形、およびあるグループの自動詞（-V 型自動詞）は、語幹に -a, -ʊ, -ʌ, -o のいずれかの接尾辞がつく。-o が現れるのは語幹が e か o の母音

をもつ場合、-ʊ が現れうるのは語幹が ɪ か ʊ の場合（ただし -a になる動詞もある）だけである。これらは [±ATR] 素性についてだけではなく開口度に関しても母音調和しているようだが、なぜ後舌母音が選ばれるのかなど、その原理は未解明である。

(15)	[-ATR]		[+ATR]	
	kìt-**â**	「働く」	míj-**ʌ̂**	「沸かされる」
	kìn-**ô**	「閉められる」		
	pòr-**â**	「讃えられる」	wùr-**ʌ̂**	「書かれる」
	kòr-**ô**	「耕される」		
	dɛ́r-**â**	「料理される」	rém-**ô**	「刺される」
	kɔ̀n-**â**	「作られる」	dót-**ô**	「寝る」
	dár-**â**	「疲れる」	wʌ̀r-**ʌ̂**	「歩く」

3. 声調

バリ語は (16) に示すように、意味の区別にかかわる音の高さの区別（声調）をもつ。区別される高さの種類は基本的に高（H/high, á）、低（L/low, à）だけであり、語末音節でのみそれらの組み合わせとしての下降（F/falling, â）があらわれうる。(17) に示すように、下降を除けば声調はどのように並ぶこともあるようである（ただし、手元の実例では HLL は借用語だけ、LHH は接尾辞を含むものだけが確認できる）。

(16)	gwàndá	「こんにちは」	vs.	gwándà	「キャッサバ」
	nán	「どれ」	vs.	nân	「1SG（私）」

(17)						
	LLL	kɛ̀kɛ̀rì	「文化」	HLL	wáràgà	「紙」（アラビア語借用語）
	LLH	kàɓòrɛ́	「明日」	HLH	kágòré	「カニ」
	LLF	kʌ̀mìrû	「ライオン」	HLF	wɔ́sɔ̀nɔ̂k	「父の姉妹、母の兄弟」
	LHL	kɔ̀rɔ́pɔ̀	「葉」	HHL	tálámà	「サル」
	LHH	pìrít-ʌ́n	「場所」（複数）	HHH	nárákwán	「女」
	LHF	mʊ̀sálâ	「三」	HHF	mélésên	「畑」

東・東南アジア大陸部の声調言語とは趣が異なり、サブサハラ・アフリカ諸語では、声調は異なる語を区別するためというより、文法的な区別に役立っていることが多いことが知られる。バリ語でも、(18) 一部の名詞や形容詞の単数形・複数形、(19) 基本形と道具形（適用態の一種、道具を目的語として表すための動詞形）の命令形、(20) 基本形と多回数形（「何度も／習慣的に」などの意味を表す）、(21) 関係節と主語焦点文（分裂文）などは声調の違いだけで示される。ただし、単純に、とある声調がとある文法機能をもつというよりは、複雑な語形交替のなかで偶然に声調だけしか違わないようなパタンが現れることがある、といったほうがより現実に即している。

(18) 単数　複数
ŋɔ́tɔ́　ŋɔ́tɔ̂　「人」
ná-b**ɔ́**t　ná-b**ɔ̂**t　「太い（女性形）」

(19) dɛ̀r-ɟ-**í**　súkùrì[14]　「鶏を料理しなさい」
料理する-[能動]-[命令]　鶏
dɛ̀r-ɟ-**ì**　súkúrì　「それ（道具）で鶏を料理しなさい」[15]
料理する-[能動]-[道具.命令]　鶏

(20) a. nân **kɛ́~kɛ̀n-djâ**　bûk　「私は本が読めます／読みます」
1SG [非過去]~読む-[能動]　本
nân **kɛ̀~kɛ́n-djà**　bûk　「私はよく本を読みます」
1SG [多回数]~読む-[能動]　本
b. nân **dɛ̀~dɛ́r**　(Ø)　「私はそれ（ら）を料理できます／します」
1SG [非過去]~料理する　3SG/PL
nân **dɛ̀~dɛ̂r**　(Ø)　「私はよくそれ（ら）を料理します」
1SG [多回数]~料理する　3SG/PL

[14] 本来の声調のあらわれは súkúrì「鶏」だが、H の後ではこのような形になる（後述）。
[15] バリ語では、3 人称代名詞は主語の場合を除いて現れないことが多い。ただし、一部の文構造では 3 人称代名詞が必要であるなど、複雑なふるまいをみせる。

(21) ŋ́ɔ́tɔ́ ná wɪ́rɪ̂ 「歩いている人（女）」
人 [関係節[女]] 歩く
ŋ́ɔ́tɔ́ ná wɪ̀rɪ̀ 「（動物などでなく）人（女）が歩いている」
人 [主語焦点[女]] [焦点].歩く

声調を区別する言語の多くでみられる現象として、とある声調が隣接する声調に影響するというもの（変調 tone sandhi）がある。バリ語もこの例にもれず、例えば語末に H があった場合、それに続く語頭付近で変調が生じる（H や F は L に、L は H に、HH や HF は HL に、など複雑なルールがある ; Yokwe 1987 参照）。この結果、(22a) では ná が nà になり、(22b) では kótók が kótòk になるが、その結果 ná は影響を受けない。つまり、この変調のルールは、統語論的なまとまり（句など）とは無関係に、単純に隣り合う順に従って適用されていくわけで、この変調には文法的な機能があるとはいえない。

(22) a. kótók「口、言語」＋ná「の」＋bàrì「バリ」
kótók **nà** bàrì「バリ語」
b. nân「1SG」＋dɛ̀~dɛ́n「[非過去]~知っている」＋kótók＋ná＋bàrì
nân dɛ̀~dɛ́n **kótòk** ná bàrì「私はバリ語を知っている」

むしろ、声調は意味の区別に役立っていることもあるため、場合によってはこの変調の結果、同音異義になってしまう場合もある（例 (16, 18) を参照）。

(23) dɔ́ à gwút nàn 「あなたは私／どれを打ちました（か）」
2SG [過去] 打つ 1SG／どれ
dɔ́ à gwút ŋ́ɔ́tɔ̀ 「あなたは人／人々を打ちました」
2SG [過去] 打つ 人／人々

ただし、この変調ルールには例外もかなり見られる。すなわち、特定の文法構造によってはこのルールが適用される、あるいはそれとは別のルールが適用される、といった事例である。ルールが適用されない例の代表は、主語と述語（動詞やコピュラ）の間で

ある[16]。ただし、この例外ルールが適用された結果、上の例とは反対に、例えば同音異義語の ɓâŋ「家」と ɓâŋ「ない」が区別されるといったこともある。

(24) ná　ɓàŋ　「この家」
　　この　家
　　ná　ɓâŋ　「これはない」
　　これ　ない

その他の個別的なルールが適用される例としては、場所をあらわす前置詞 í がある。もとの声調がどうあれこれに続く名詞は語頭が LL に[17]、これに指示詞に修飾された名詞句が続けば L(L...)H という声調パタンが現れる。結果として、(25) のように、場合によっては何ら意味とは無関係に、単に文法構造に付随して、一つの名詞が 3〜4 種の異なる声調のあらわれをもつことがある。

(25)	mélésên	「畑」	kɔ́pɔ̀	「コップ」
	ná mélèsên	「この畑」	ná kɔ̀pɔ̀	「このコップ」
	í mèlèsên	「畑で」	í kɔ̀pɔ̀	「コップに」
	í nà mèlèsén	「この畑で」	í nà kɔ̀pɔ́	「このコップに」

実は、バリ語にはこうした、特段それ自体で意味には関わらないのだが、必ずそのように声調が替わるという現象が多い。バリ語の声調については Yokwe（1987）がかなり詳しくデータを収集しているが[18]、その原理自体が説明しつくされているとは言いにくく、今後の研究が俟たれる。

---

16) ここではとりあえず節で最初に現れる名詞句を主語と定義しておく。ただし、バリ語のある種の関係節では動詞に主語が後続するが、この場合には変調が生じる。

17) 実際には 3 拍目以後の声調交替もみられるが、複雑であるためここでは省略している。ただし、語頭が LL になるという点は一般化できる。

18) これまでの筆者の観察によれば、Yokwe（1987）の記述自体は正確である。筆者の調査結果と異なる点も僅かにみられるが、恐らくそれは方言差だと推測される。声調に関わる現象としては、アフリカ諸語では広くダウンステップ（downstep）がみられるが、バリ語では今のところそれと認めるべき現象は基本的にはみられない。

4. 性

1 節でふれたが、バリ語を含む東ナイル諸語は、ナイル・サハラ語族としては珍しく、性、つまり自然性（sex）をモデルとする名詞の文法的な分類を発達させている。フランス語などと同様に、無生物名詞にも男女の分類が適用されており、しかも形の上から判断できないことが多い。非バリ語派のトゥルカナ語やマサイ語などは、さらに「指小」性（diminutive）あるいは「場所」性という第三の性を発達させているが、バリ語には東ナイル祖語に遡ることができる、男女二つの性（*lɔ [男性], *na [女性]）しかない[19]。

また、大部分の東ナイル語派では名詞に性を表す接頭辞がついている（スワヒリ語など、バントゥ諸語のクラス接頭辞に似ている）。これに対し、バリ語派はこの特徴をもたない。つまり、名詞の形からは性は判断できない[20]。

(26)　マサイ語　バリ語

ɔl-ŋéʃép	ŋédép	「舌」（男性名詞）
ɛn-kótók	kótók	「口」（女性名詞）

バリ語で形態的に性が区別されるのは、指示詞、関係節標識、焦点標識、所有前置詞「の」、（一部の）所有人称代名詞、疑問詞「どの～」、不定標識「とある～」、一部の形容詞などであり、ほとんどはそれ自体が名詞的なふるまいをするか、直接隣接して名詞を修飾する役割をもつものである[21]。(27) に示す近称指示詞「これ、この」の単数形は比較言語学的に再建される最も単純な男性・女性標識の形と一致しており、その他の語類へは指示詞から拡大していったと推定できそうである。

---

19) 語源的には *lɔ は人間（職業）名詞接頭辞、*na はナイル祖語 *ɲaa「娘」に由来すると考えられる（Heine & Vossen 1983）。東ナイル語派における性の発達は、同様に男女の性をもつクシ諸語との言語接触に起因するのではないかといわれたが、Heine & Vossen (1983) は懐疑的である。なお、東ナイル語派の分布域からは少し離れるが、エチオピア・スーダン・南スーダン国境のコモ諸語、スーダン南部はヌバ山地のカドゥ諸語、南スーダン西部のウバンギ諸語もやや似た性のシステムをもつ。

20) 女性形の非バリ語派でこのタイプに属するのは、バリ語と地理的に近いロピット語だけである。(26) のマサイ語の例は Tucker & Mpaayei（1955）に基づく。

21) 文法的な性の付与を体言化（nominalization）の一種であるとする柴谷（2021）の主張は一考の価値がある。非バリ語派の東ナイル諸語でも性が体言化の機能を持つことが指摘されている（Heine 1980: 19）。未公刊だが、仲尾（2023）ではバリ語における性と体言化に関するトピックについて、やや詳細に論じた。

(27)　lɔ́ ŋɛ́dɛ̀p 「この舌」
　　ná kɔ́tɔ̀k 「この口」

ここまでなら、バリ語はフランス語などと似た性のシステムをもっているように見えるが、性を示す要素のあらわれ方をつぶさに観察すると、不思議な現象もみられる。

バリ語では生物（人間・動物）名詞の大部分（親族名称などを除く）も特に性標示をもたず、実際の自然性に従って上に挙げた特定の修飾語の男性形・女性形が用いられる。つまり、これらの修飾語が必要ない文脈であれば、性は文法的に表現されることはない。バリ語では人称代名詞やほとんどの述語類（動詞やコピュラなど）、一部の形容詞では性は示されないため、性の区別をもつ言語であるにも関わらず、(29) のように一度も性を明示されない文を作ることも十分可能である。

(28)　ŋɔ́tɔ́　「人、男、女」　ɟô　「友人」
　　lɔ́ ŋɔ́tɔ̀ 「この男」　ɟô líò 「私の友人／ボーイフレンド」
　　ná ŋɔ́tɔ̀ 「この女」　ɟô níò 「私の友人／ガールフレンド」

(29)　ɲé　à　ŋɔ́tɔ́ dɔ̀mà　「彼／彼女は偉い人だ」（筆者による作例）
　　3SG　[コピュラ] 人　大きい

これまでに 2・3 節でも例を挙げてきたが、バリ語の名詞には語ごとに決まった形をもつ単数形・複数形がある[22]。修飾語も単数・複数の形が異なるものがほとんどだが、所有前置詞や所有人称代名詞（kwê「私の[複数]」など）の複数形はほとんどが男女同形である。一方、関係節標識（男性 lɔ́(gwɔ̂n)、女性 ná(gwɔ̂n)）は単複の区別をもたない。

(30)　ŋɔ́tô　「人々、女／男たち」　ɟɔ́lìn　「友人たち」
　　kɔ́lɔ́ ŋɔ́tɔ̀ 「この男たち」　ɟɔ́lìn kwê 「私の友人／ボーイフレンドたち」
　　kɔ́ɲɛ́ ŋɔ́tɔ̀ 「この女たち」　ɟɔ́lìn kwê 「私の友人／ガールフレンドたち」

[22] 名詞で単複が同形のものは、現在筆者が知る限り ŋɔ̂「物」だけである。

(31) ŋʊ́tʊ́ lɔ́(gwɔ̂n)/ná(gwɔ̂n) dó~dótò 「寝ている男／女」
人 [関係節[男／女]] [非過去]~寝る
ŋʊ́tʊ̂ lɔ́(gwɔ̂n)/ná(gwɔ̂n) dó~dótò 「寝ている男／女たち」
人々 [関係節[男／女]] [非過去]~寝る

例外的に、述語で性と数が示されるものがある。指示詞から声調交替によって派生した、存在を表すコピュラである（例えば「(ここに）ある・いる」)。このコピュラは、(33) のように、動詞未完了形（次節で述べる）について、ある種の現在進行を表すこともできるが、この場合でも直示的な意味は残る[23)]。

(32) nân lɔ̀/nà nî 「私（男／女）はここにいます」
1SG [（ここに）ある[男／女]] ここ
jî kʊ̀lɔ̀/kʊ̀nɛ̀ nî 「私たち（男／女）はここにいます」
1PL [（ここに）ある[男／女]] ここ

(33) nân lɔ̀/nà dɛ̀r-ɟá súkùrì
1SG [（ここに）ある[男／女]] [未完了]+料理する-[能動] 鶏
「私 [男／女] は（ここで）鶏（肉）を料理しています」

アフリカで文法的な名詞分類をもつ言語群といえばスワヒリ語をはじめとするバントゥ諸語が有名であり、その名詞分類はかなり整然と文法システム全体にわたっている。それに比べるとバリ語の性の表われは雑然として見えるかもしれないが、日本で広く学ばれる外国語の中でも、ヒンディー語やウルドゥー語などは、性や数は要所要所でしかあらわれないことを考えれば、バリ語も普通の言語といえるかもしれない。

---

23) 本稿では例示しないが、バリ語には中称（それ、その)、遠称（あれ、あの）の系列もある。コピュラとして用いられる指示詞はそれ自体で節を終えることはできず、何らかの後続の要素が必要であるため、(32) では「ここにある」というコピュラに「ここ」という副詞が用いられている。ただし、それぞれの指示詞の直示的な意味が一致している必要があり、遠称指示詞（lú/nú「あれ、あの（男／女)」）から派生したコピュラ lû/nû「あそこにある」であれば副詞は ɲûn「そこ、あそこ」が選択される。(33) の例では主語が 1 人称であるため、近称のコピュラしか用いることができず、lû/nû を用いると文として成り立たない。

5. 動詞活用と情報構造・文構造

1 節で述べたとおり、バリ語派は、マサイ語などの同系の東ナイル諸語、あるいは広く東スーダン諸語がもつ動詞の人称活用をもたない。一方、動詞は文の情報構造（文中のどの要素が新しい／古い情報であるか）、節構造（節が動詞で終わるか否か）により色々な形に活用するという現象がみられる（詳細は Nakao 2024, forthcoming-c 参照）。

(34) は、たった一つの事実を、どこにどのような情報の力点を置くか次第で 5 通りに表現しわける例である。(34a) はいわば最も普通な構文、(34b) は目的語を相手が話題にしている（主題）の場合、(34c,d,e) はそれぞれ目的語・主語・副詞を対比的に新しい情報（焦点）として示している場合である。(34c,d,e) の場合、情報構造に強い意識が働くためか、時制／相／法の意味の区別がなくなる（中和する）。逐語訳では示しにくいが、動詞の [焦点] 形（語頭に低声調が現れる）は、能動接尾辞がつけば動詞直後の要素（目的語か副詞）、接尾辞がつき主語焦点標識（性が示される）があれば主語を焦点化する。接尾辞がつかなければ目的語を主題化し、かつ副詞を焦点化する。

(34) a. nân **à** **dɛ́r-ɟá** súkùrì í ɓàŋ
1SG [過去] 料理する-[能動] 鶏 で 家
「私は鶏（肉）を家で料理した」（文焦点、動詞（句）焦点）

b. nân **à** **dɛ́r** súkùrì í ɓàŋ
1SG [過去] 料理する 鶏 で 家
「私は [あなたの言っているその] 鶏（肉）は家で料理した」（目的語主題）

c. nân **dɛ̀r-ɟá** súkùrì í ɓàŋ
1SG [焦点].料理する-[能動] 鶏 で 家
「私は [魚などではなく] 鶏（肉）を [！] 家で料理した／する」（目的語焦点）

d. nân **lɔ̀/nà** **dɛ̀r-ɟá** súkùrì í ɓàŋ
1SG [主語焦点[男／女]] [焦点].料理する-[能動] 鶏 で 家
「[ほかでもない] 私が [！] 鶏（肉）を家で料理した／する」（主語焦点）

e. nân **dɛ̀r** súkùrì í ɓàŋ
1SG [焦点].料理する 鶏 で 家
「私は鶏（肉）を [よそではなくて] 家で [！] 料理した／する」（副詞焦点）

情報構造によって動詞の形あるいは構文が替わる、という点では、見方によってはハンガリー語やフィリピノ語など日本で比較的よく勉強される外国語でも似た現象がみられる。もう少し広くみれば、目的語の何らかの性質（「主題」性を含む）が構文に影響を与える（「示差的目的語標示」）という点でいえば、さらにかなりの数の言語に似た現象がみられる。しかし、バリ語はかなり多めの区別をもつといえそうである。

ただし、(34a,b) のような区別は過去のほか完了や命令などを表す動詞形にもみられるが、全ての時制／相／法でみられるわけではない。現在や可能などの時制や法をあらわす非過去形、進行や習慣といった相を表す未完了形にはみられないのである。

ここで「非過去形」とよぶのは、語幹の最初の子音と母音からなる拍を重複させることによって作られる形のことである。バリ語の動詞はその大部分をしめる動作動詞と少数の状態動詞にわけられるが、この分類の主要な基準として、動作動詞は非過去形がある種の可能や未来のようなニュアンスをもつ非現実法（irrealis）を表すのに対し、状態動詞の非過去形は単純に現在の状態を表すという点がある。

(35) a. nân　dɛ̀~dɛ́n　dɔ̀　「私はあなたを知っている」（状態動詞）
　　1SG　[非過去]~知っている　あなた
　b. nân　dɛ̀~dɛ́r　súkùrì　「私は鶏（肉）を料理できる」（動作動詞）
　　1SG　[非過去]~料理する　鶏

問題になるのは、動作動詞をもちいて現在の状態（進行や習慣などの未完了相）を表す場合だが、バリ語では先ほど紹介した焦点形を転用する。結果的に (36) のように (34c) と見かけが同じ文ができるが、未完了を表すこの場合には、「鶏（肉）」が焦点化されていると常に解釈されるわけではない（もちろんそう解釈することもできる）。こうした転用が行われた具体的なメカニズムははっきりしないが、焦点形では時制／相／法の区別が中和することと関わっている可能性はあるだろう。

(36)　nân　dɛ̀r-ɟá　súkùrì　í　ɓàŋ
　　1SG　[未完了].料理する-[能動]　鶏　で　家
　　「私は家で鶏（肉）を料理する／している」

別の言い方をするなら、過去形では目的語の情報構造により動詞の形が替わるのだが、未完了形では目的語に焦点があってもそれを示しわけられない。それだけでなく、この焦点形では能動接尾辞（この動詞では -ɟa）が必須であり、過去形のように目的語が主題であっても形が替わらない。つまり未完了形では逆に目的語の情報構造が中和しているともいえる[24]。システムとしてはかなりいびつに見える。

バリ語の動詞の問題はこれだけではない。接尾辞つきの動詞焦点形は動詞の直後の要素を焦点化するため、(37a) のように目的語がなくてもよい。そして、もちろんこの構造も、(37b) のように未完了形として用いることができる。

(37) a. nân　dɛ̀r-ɟá　　í　ɓàŋ
　　1SG　[焦点].料理する-[能動]　で　家
　　「私は [外ではなく] 家で [！] 料理した／できる／する／している」（焦点）
　a. nân　dɛ̀r-ɟá　　í　ɓàŋ
　　1SG　[未完了].料理する-[能動]　で　家
　　「私は家で料理する／している」（焦点解釈なし、未完了）

問題は、目的語も副詞もない場合である。焦点形はそれだけで文を終わらせることはできない。未完了形ならばそうした要請がなくてもよさそうなものだが、焦点形のルールに合わせ、そのような文を作ることはできない (38a)。ここで、再び非過去形が登場する (38b)。この場合には可能と未完了の二つの解釈があることになる。

(38) a.*nân　dɛ̀r-ɟá
　　1SG　[未完了].料理する-[能動]
　b. nân　dɛ́~dɛ̀r-ɟà
　　1SG　[非過去]~料理する-[能動]
　　「私は料理する／している／できる」

[24] もちろん、分裂文や左方移動といった方法で焦点化や主題化を文法的に表すこともできる。これらの方法は動詞が過去形の場合にも用いることができるのだが、その場合、これらを用いない（動詞の活用だけで示す）場合と、明瞭な機能の違いはなさそうである。

まとめなおすなら、未完了形は後ろに何かが続く場合 (36, 37b) とそうでない場合 (38b) で違う動詞形を使わないといけないということになる。これはバントゥ諸語研究で conjoint/disjoint と呼ばれる現象に似ている。日本でよく学ばれる外国語なら、例えば中国語の完了標識「了」は（機能としては単に相を表すだけであるにも関わらず）文の構造を規定するという点では少し似ているかもしれない。

注意が必要なのは、本稿で仮に「能動接尾辞」と呼んでいる接尾辞が必須であるという点である[25]。この接尾辞はこれまでに見たように様々な動詞活用形に現れるため、現在では具体的にその意味を同定しにくい。しかし、比較言語学的には逆受動（antipassive、目的語を省略あるいは明言しないタイプの自動詞形）に用いられる接尾辞に由来しており、この用法はその名残りのようである。ただし、この接尾辞付き非過去形も目的語をとれないわけではないが (39)、その際は可能／未来（非現実）しか表さず、接尾辞のつかない非過去形 (35b) と同じ意味を表す。

(39) nân dɛ́~dɛ́r-ɟá súkùrì
1SG [非過去]~料理する-[能動] 鶏
「私は鶏を料理できる」

本稿では十分紹介できないが、時制／相／法（および否定極性）の表現にはほかにも多様なものがある。加えて態の交替（受動、使役、逆受動／能動、適用など）や、3 節で少し例を挙げた多回数性、(40) で部分的に例示するような方向性（動作や目的語の移動に関わる）に関する動詞の派生や活用もみられる。

(40) a. nân à mɛ́t dɔ̀ 「私はあなたを見た」
1SG [過去] 見る 2SG
b. nân à mɛ̀t-árà dɔ́ 「私はあなたが行くのを見た」
1SG [過去] 見る-[向こうへ] 2SG
c. nân à mɛ̀t-ɔ́n dɔ̀ 「私はあなたが来るのを見た」
1SG [過去] 見る-[こちらへ] 2SG

[25] 接尾辞をとらない形 nân dɛ̀~dɛ́r は「私はそれを料理できる」という意味を表す（例 (20) 参照）。このように、バリ語では接尾辞の欠如が、3 人称目的語を表すこともよくある。

つまり、動詞は (41) のように語根に多ければ 4 つから 5 つの要素（重複や接辞）がついて形成されることも多い。それぞれの並び方次第で接辞は異なる形をとることも多く、バリ語はやや複雑な動詞活用をもつ言語だと言えるだろう。

(41) a. mɛ̀~mɛ̀t-w-ɛ̀-ní　「来るのを何度も見られろ」
　[多回数]~見る-[こちらへ]-[受動]-[命令]
　b. tò~tò-dìn-ʌ̀kìn-d-í　「何度も教えてやれ／くれ」
　[多回数]~[使役]-知る-[適用]-[能動]-[命令]

6. おわりに

本稿では、これまでの筆者によるバリ語記述言語学的研究成果の一部を一般・学生向けに還元することを目的として、バリ語の歴史・社会的背景、母音調和、声調の対立、性や数の標示、情報構造と連動する文構造の交替について、できるだけ専門的な議論に立ち入ることを避けつつ紹介した。

冒頭で述べたとおり、日本国内ではアフリカなどグローバルサウスの諸言語についての知識はアクセスが容易とはいえず、一般・学生諸氏にとって「なじみのない言語」かもしれない。しかし、これらの言語ははたして「興味をもてない言語」だろうか。本稿で部分的に示したように、バリ語に見られる様々な言語現象には、日本でそれなりの学習者人口をもつ外国語とも類似しているものも多い[26]。こうした外国語を学ぶ一般や学生諸氏にとっては、親しみをもって理解される点も多くあるだろう。

本稿で扱ったバリ語の特徴の多くは、実はサブサハラ・アフリカの諸言語では比較的よくみられるものであり、バリ語（あるいは東ナイル語派）を知ればそれを一つの参照軸としてアフリカ諸語の世界を旅することもできるかもしれない。しかし、その世界は広大であり、その内実は、広く学ばれる「外国語」をすべて足したものよりもはるかに多様である。その一端はまたの機会に紹介したい。

---

[26] 本稿の元となった授業実践では、バリ語が基層言語の一つとなって成立したジュバ・アラビア語や、筆者の母語である日本語大阪（泉州北部）方言に見られる類似の言語現象を紹介した。そのデータ提示もそれなりの関心を寄せられたが、新奇なデータでもあったため話題がぶれてしまったことを認めたい。本稿ではあくまでバリ語に焦点を置くためこれらのデータは削除したが、稿を改めて提示したい。

参考文献

Eberhard, David M., Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.). 2024. *Ethnologue: Languages of the World*. 27th edition. Dallas, Texas: SIL International. http://www.ethnologue.com

Heine, Bernd. 1980. *The non-Bantu languages of Kenya*. Berlin: Dietrich Reimer.

Heine, Bernd & Rainer Vossen. 1983. "On the origin of gender in Eastern Nilotic." Rainer Vossen & Marianne Bechhaus-Gerst (eds.) *Proceedings of the International Symposium on Languages and History of the Nilotic Peoples, Cologne, January 4-6, 1982*, Vol. 2. pp. 245-268. Berlin: Dietrich Reimer.

古閑恭子. 2022.『フィールドワークではじめる言語学』ひつじ書房.

小森淳子. 2023.「マイナー言語を半期だけ教える時に教える 10 のこと—バンバラ語を学ぶ学生のための類型論」『外国語教育のフロンティア』6, 175-189.

栗本英世. 2001.「英語、アラビア語、ジュバ・アラビア語—スーダンにおける言語、教育、政治、アイデンティティ」宮本正興・松田素二（編）『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察』pp. 74-92. 人文書院.

町田健 (監修). 2010.『ヨーロッパのおもしろ言語』白水社.

村橋勲・仲尾周一郎. 2020.「留学という旅—日本の南スーダン人」『季刊民族学』176, 34-41.

中川裕 (監修)・小野智香子 (編). 2021.『日本語の隣人たち I+II』白水社.

Nakao, Shuichiro. 2012. "Revising the substratal/adstratal influence on Arabic creoles." Osamu Hieda (ed.) *Challenges in Nilotic Linguistics and More, Phonology, Morphology and Syntax*. pp. 127-146. Fuchu, Tokyo: ILCAA.

仲尾周一郎. 2023.「バリ語（Bari）における性標示」「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」および「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」プロジェクト合同研究会（2023 年 7 月 15 日）発表資料.

Nakao, Shuichiro. 2024. "Between antipassive and differential object marking in Bari: A markedness paradox and the antipassive-to-active shift." *Working Papers in African Linguistics*, 2: 53-82.

仲尾周一郎. 近刊.「南スーダンの諸言語」山田真弓(編)『南スーダンを知るための 43 章』明石書店.

Nakao, Shuichiro. forthcoming-a. “On varieties of Bangala in early colonial Congo Basin” manuscript.

Nakao, Shuichiro. forthcoming-b. “Do Arabic pidgins and creoles constitute evidence against monogenesis?” manuscript.

Nakao, Shuichiro. forthcoming-c. “The origins of the conjoint/disjoint alternation in Bari.” *The University of Nairobi Journal of Language and Linguistics*.

塩田勝彦 (編). 2012.『アフリカ諸語文法要覧』溪水社.

Spagnolo, Lorenzo M. 1933. *Bari grammar*. Verona: Missioni Africane.

Spagnolo, Lorenzo M. 1960. *Bari-English-Italian dictionary*. Verona: Missioni Africane.

Tucker, Archibald N. & J. Tompo Ole Mpaayei. 1955. *A Maasai grammar*. London: Longmans, Green & Co.

Yokwe, Eluzai Moga. 1987. “The tonal grammar of Bari.” Doctoral dissertation, University of Urbana-Champaign.

柴谷方良. 2021.「連体修飾の文法—類別詞と文法性を中心に」鄭聖汝・柴谷方良（編）『体言化理論と言語分析』pp. 459-555. 大阪大学出版会.